Wine Books

四季歌ごよみ

大岡信

恋

四季歌ごよみ　恋

大岡信

総括――――――有働義彦
企画編集――――安西　剛
編集ディレクター――中田久美子

ワインブックス
四季歌ごよみ　恋
1991年6月20日　第1刷発行

著者――――――大岡　信
発行人――――――児山敬一
編集人――――――佐藤　昭
発行所――――――株式会社 学習研究社
〒145 東京都大田区上池台4-40-5
TEL 03(3726)8111(代表)
振替・東京8-142930
印刷所――――――共同印刷株式会社

●この本に関するお問い合せやミスなどがありましたら、
文書は、東京都大田区仲池上1-17-15 学研お客さま相談センター
電話は、03(3726)8347　学研人文企画室へお願いします。

無断転載・無断複写複製(コピー)を禁ず
©Makoto Ooka 1991 Printed in Japan
165028　ISBN4-05-105748-8

四季歌ごよみ

恋

大岡信

◉目次

恋

和泉式部……あくがれ尽きぬ魂の渇き——5

建礼門院右京大夫……かえらぬ昔への悲歌の結晶——49

与謝野晶子……時を超える夫と妻の相聞歌——77

人生

正岡子規……肉体の苦と精神の至美の世界と——113

石川啄木……創意とユーモアに生きる歌——141

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

恋のうた人生のうた詞華集(しかしゅう)――170

◉フォト・イメージ◉恋のうた――33

◉フォト・イメージ◉人生のうた――105

●カバー・表紙作品
芹沢銈介

●写真
Antonín Vodák 2-3
Koh Fujiwara 32
早坂　卓 33 42-43
山下庫司 34-35
石郷岡まさお 36-37
勅使河原剛道 38-39
木原和人 40-41
大塚一道 44-45 110-111
大底善人 46-47
河原地佳子 48
仲　百合子 76
丹地保堯 105
江口慎一 106-107
今野岳志 108-109
寺島彰由 112
今井高嶺 140
森田敏隆 149

アフロ・フォト・エージェンシー
キユウ フォト インターナショナル
ダンディ・フォト
フォトニカ
ボンカラー・フォトエイジェンシー
モントレ

●資料撮影
原　耕平

●装幀
内藤安彦

●レイアウト
吉田カツヨ
仲田延子

●編集協力
深瀬サキ

和泉式部

……あくがれ尽きぬ魂の渇き

あらざらむこの世のほかの思ひ出に
いまひとたびのあふこともがな

『後拾遺集』第十三・恋に「心地例ならず侍りけるころ、人のもとにつかはしける和泉式部」として見える歌で、病のため不安を感じ、ある男性に贈った歌なのだが、何よりも『百人一首』中の名歌としてあまねく知られている。

自分は病気が重くなって、命は長くないかもしれない。「この世のほか」である「あの世」に移ってしまってからの思い出のために、せめてもう一度あなたにお逢いしたい、逢ってください、ぜひとも、との思いをこめて男に贈った歌である。贈られた相手が誰であったかは分からない。

和泉式部は二十三歳で和泉守橘道貞と結婚し、翌年には娘小式部をもうけた。ところが道貞がつかえる太皇太后宮(冷泉帝皇后)が病気療養の方たがえのため、太皇太后宮の権大進でもあった和泉守道貞の家に移り、そのままそこで崩御したことから式部の運命は狂った。太皇太后宮のもとへ、異母子の為尊親王(冷泉帝第三皇子)

が見舞いに訪れるうち道貞の妻式部と知るところとなったからだ。親王二十二歳、式部は二十七歳くらいだったらしい。この情事はたちまち評判になった。道貞は妻を離別し、式部の父も怒り悲しんで娘を勘当する。ところが、為尊親王は二十四歳で夭折した。式部は悲嘆にくれるが、運命は彼女のためにさらに数奇な筋書きを用意していた。亡き親王の弟、帥宮敦道親王が新たに式部に言い寄り、彼女もまもなくその恋を受け入れたからである。当時、敦道親王は二十三歳、式部は三十歳ぐらいだったらしい。親王はすでに結婚していたが、年上の恋多き女和泉式部にうつつをぬかし、彼女を自邸の一角に移り住まわせる。親王の妃は屈辱にたえず邸を去った。年若い男の恋のはげしさは尋常のものではなかった。式部の方も、この眉目秀麗な皇子を深く愛した。

しかし式部はこれほどの仲だった敦道親王にも、四年あまりのちに先立たれる。式部は悲しみの底から恋の尽きせぬ思い出によって染めあげられた悲歌をたくさん詠んだ。親王の死を悲嘆した彼女の歌は百二十四首の多きにのぼるが、これらは和泉式部の詠んだ数多い歌の中でも、一つの頂点をなしている。

捨て果てむと思ふさへこそ悲しけれ
君に馴れにしわが身と思へば

鳴けや鳴けわが諸声に呼子鳥
呼ばば答へて帰り来ばかり

たぐひなく悲しきものは今はとて
待たぬ夕のながめなりけり

だが、このような深い歎きをうたいながらも、彼女は男に寄り添わねばいられなかったし、男たちもまた言い寄ったらしい。女として、よほど魅力があったのだろう。

一条天皇の中宮彰子に仕えたのはその後のことだった。紫式部、赤染衛門らも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

同僚であった。ある日中宮の父藤原道長が、彼女の扇にたわむれに「浮かれ女の扇」と書いたことがあった。平安朝の、一種自由恋愛過剰ともいうべき時代であっても、時めく権力者から「浮かれ女」の異名を奉られるのはよほどのことで、彼女の生きかたが周囲からどれほどかけ離れていたかを鮮やかに示すエピソードであろう。

枕だに知らねばいはじ見しままに
君語るなよ春の夜の夢

この歌は、彼女が予想もしていない時に言い寄られ、枕さえない場所で「春の夜の夢」のように短い、しかしはげしい逢引きをしたあと、男におくった歌だと、窪田空穂は解釈している。当時のものの考え方では、他のだれもが知らなくても、枕だけは恋の秘密を知っているというわけだったが、その枕さえ知らないというのは、場所も時も普通ではなかったことを意味する。さすがの「浮かれ女」が、醜聞をきらって「君語るなよ」と言わずにはおられなかったほどの情事であり、また思いがけない相手であったと思われる。

しかしそのように男から男へ遍歴を重ねても、彼女の生の渇きそのものだったといっていいほどの十全な恋への夢は、満たされることがなかった。恋によって傷つき、その傷をいやそうとして新たな恋に走る。得体のしれないいらだちのような不安が、和泉式部の歌の中で、暗い命のほむらとなって燃えているようにみえる。

そういう意味で、次の有名な歌は和泉式部の心の本質的な暗さを象徴しているような歌である。男に忘れられて、鞍馬の貴船神社に詣でていたときに作ったものという。

もの思へば沢の蛍もわが身より
あくがれ出づる魂かとぞ見る

茫然ともの思いにふけっているとき、蛍がはっとするほど頼りなげに明滅して御洗川の水辺を飛ぶ。「あれはわが肉体から抜け出てしまった私の魂ではないか」。われにかえっても、胸さわぎは消えない。古代以来のものの考え方からすると、魂が肉体を遊離することは死を意味する。和泉式部は恋を失うことがそのまま自らの死

を意味するほどの激しさで、恋に生の完全な充足を求めた女性だったらしい。しかし現実には、そのような要求にこたえうる男はいなかった。

恋に身をやかれながらも、ついに魂の満たされることのなかった叫びが彼女に歌をほとばしらせる。彼女はおのれをいつわることができない魂だった。和泉式部の歌の時代を超えた魅力はそこから生まれた。

如何にせむ如何にかすべき世の中を
背けば悲し住めば住み憂し

とことはにあはれあはれは尽すとも
心にかなふものか命は

この引き裂かれた心の嘆きは、遠い平安朝の女の歌とは思えない現実感をもって私たちに迫ってくるものがある。

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞
何処辺の方にわが恋ひ止まむ

【磐姫皇后】

秋の田に頭を垂れている稲穂、その上にたれこめて動かぬ朝霧――ちなみに古代では霞と霧の区別はなかったらしい――いったい私の恋は、どちらへ向けて消えて行こうというのでしょう、いっこうに晴れることのない私のこの苦しい恋は。元来は古代農民の愛誦した歌謡だろうと思われる。一方、この歌を含む四首の悲恋の作者として万葉に出ている磐姫皇后は、仁徳天皇の皇后。『古事記』などに嫉妬深い女性の典型のように描かれている伝説的な女性で、『万葉集』編者はこの恋の歌の名作を激情家の后に仮託したのである。晴れやらず重く垂れる霧に、悩ましい恋心を重ね合わせた技法がみごと。……『万葉集』

春されば しだり柳のとををにも
妹は心に乗りにけるかも

【柿本人麻呂歌集】

春になると、しだれ柳がたわたわとしなう。そのように私の心もしなう。そのしなった私の心の上に、恋人よ、おまえは乗ってしまった。「春されば」のサルは移るの意で、春がくると。「とをを」は「撓」で、タワワの母音が変化した形、たわみしなうさま。「妹は心に乗りにけるかも」という、現代でも新鮮な具象的影像による表現は、古代人には大変好まれたようで、『万葉集』には同工異曲の歌が散見される。『柿本人麻呂歌集』には、人麻呂自身の作と、当時民間で歌われた民謡を人麻呂が採集記録したものとが含まれていると考えられているが、広義には記録者としての人麻呂の作と考えてよいだろう。……『万葉集』

小竹の葉はみ山もさやに乱げども
吾は妹おもふ別れ来ぬれば　【柿本人麻呂】

「石見の海　角の浦廻を　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと　人こそ見らめ」に始まる「柿本朝臣人麻呂の、石見の国より妻に別れて上り来し時の歌」と題された有名な恋の長歌二首、反歌四首のうちの反歌一首。

あたりは笹の葉が、そのざわめきで山全体を満たしている。しかし、別れてきた妻のことをいちずに思いつめている作者自身の胸のうちは静まりかえっている。旅人は孤影を引いて黙々と山をゆくが、思いは別れてきた妻の上にたえずめぐってゆく。その孤独をさらに切なくきわだたせるようにして、笹の葉がざわめき、ざわめく。その対照に歌の隠れた中心がある。……『万葉集』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com